銀塩の世界に誘われて
――モノクロームへの回帰

札幌市医師会
美田内科循環器科クリニック
美田　晃章（みた　てるあき）

私が写真の世界に少しばかり足を踏み入れたのは、1970年代の学生時代のことでした。当時は全くの初心者でカメラを選ぶのも他人任せ、周りの先輩たちはニコン・ペンタックス・キヤノンが多かったと思います。私が購入したのはミノルタのXEでした。当時、ミノルタはメジャーなメーカーではありませんでしたが、篠山紀信のテレビコマーシャルで一気に浮上した感がありました。でもその後ミノルタが開発した世界初のAF一眼レフ「α-7000」の伝統的なマウント規格（Aマウント）とレンズ資産は2006年にソニーに継承され、そして現在の高性能ミラーレスへと繋がる礎となっています。

当時私が使用したレンズは肉眼の視界に近い50mmの標準レンズと、遠くの情景を鮮烈に引き寄せる135mmの望遠レンズでした。これらを交互に付け替えながら、露出もピントもすべて手動で行うマニュアル撮影でした。

ファインダーを覗き、フォーカスリングを回しピントの山を掴むのはなかなか初心者として難しいものでした。しかし、写真の本当の醍醐味は撮影そのものよりも、その後の「暗室」での時間でした。

大学の体育館の片隅にあった暗室。窓を完全に遮光し、赤い暗号のような光だけが微かに灯る狭い空間。そこには独特の酸っぱい薬品の匂いが常に立ち込めていました。現像・停止・定着・水洗い・乾燥を経てネガフィルムが完成。いよいよ印画紙に焼き付け、定着液に浸すと真っ白な紙の上にじわりと、まるで魔法のように光の影が像を結び始める。あの瞬間の高揚感は、言葉では尽くしがたいものがあります。意図した通りの「黒」が出ずに落胆したり、露光時間を数秒変えてはまた焼き直したり。指先を現像液で濡らしながら、何度も何度も試行錯誤を繰り返し、ようやく一枚のプリントを満足のいくまでこぎつけた時の達成感。それは効率や利便性が至上命題とされる現代とは対極にある、泥臭くも純粋な創作の喜びでもありました。

あれから長い年月が流れ、時代は銀塩からデジタルへと完全に移行しました。フィルムを巻き上げる親指の感触も、印画紙を揺らす静寂も、今や博物館の片隅に追いやられた過去の遺物となりつつあります。（しかしフィルムカメラも最近、Z世代やミレニアル世代が「不便さ」を魅力と感じ、ノスタルジーやレトロな質感、一枚を大切に撮る体験を求めて再注目されています。）

デジタルが極限まで高画質化し、誰もがスマートフォンで目も眩むような鮮やかな色彩を瞬時に共有できるようになった今、かつてのモノクロームの世界への郷愁に強く駆られています。そして先日、一つの決断と共に、ついに一台のカメラを手に入れました。

「ライカM10モノクローム」。イメージセンサーは、グレースケール記録専用として設計されており、色情報をすべて捨て去り、光の明暗と階調のためだけにその全機能を捧げた、稀有にしてストイックな写真機です。4000万画素の圧倒的な画質で高精細に描写し、ISO 160～100000と広く、ダイナミックレンジも非常に広いため、コントラストが強く、ムラのある光の中での撮影でも、光と影の領域をはっきり描写できます。色という饒舌な情報を削ぎ落とすことで初めて見えてくる被写体の骨格、光の粒子、そしてその場の空気さえも閉じ込める静寂。最新のデジタル技術を駆使しながらも、このカメラから生み出される像には、あの暗室で必死に追い求めた銀塩の深い精神性が宿っているように感じられます。あの頃、暗室の赤い光の中で迷いながら追い求めていた「理想の一枚」の続きを、このカメラともう一度探してみたいと思います。

※画像は生成AI「Gemini」により作成